

本格ミステリ

# エックベルトの行方

copyright, 1992, by Hajime Shiraiishi

## エックベルトの行方

### 1

W 大学文学部心理学科の教授であり私の恩師でもある村越先生は、東京のお方であるが、それとは別に、信州の高原地帯にささやかな別宅を持っておられる。夏休みになると、先生は、避暑方々、お気に入り入りの学生数名を伴って別宅に赴き、そこで寛いだ日々を過ごされるのが例年の習いであった。

思えば、すでに遠い学生時代、私も、何度か先生のお世話になり、北側に面した落ち着いた書齋で、窓外に見える眩しいばかりの緑と彼方の山並みに目を細めつつ、先生のご専門であった情動理論についての貴重なお話に耳を傾けたものである。

書齋といえは、別宅であるにもかかわらず、膨大な数に上る蔵書が収められていたことを述べておかねばならない。

東京の大学の研究室、そして御自宅の書齋にびっしりと専門書が並んでいたことは

言うまでもないが、別宅の書齋には、それらとはまた趣を別にした、どちらかと言えば書誌学的興味に基づいた蔵書が集められており、それがまた、別宅を訪れる私たちの垂涎の的であった。心理学史上に輝く名著の初版本がずらりと並んだ様は、ただ壯観というほかはなく、とりわけ、ヴントの「生理学的心理学綱要」の三巻本を触らせていただいたときなど、生涯を捧げようとするささやかな学問の萌芽をじかに慈しむ感激に、果てしなく深い溜め息をつかされたものだった。

別宅は、すっかりとくたびれた、小さな洋風の木造二階立て家屋にすぎないのだが、先生が、そこに二箇所も書齋を設けられたというのが興味深い。

二つの書齋は、それぞれ一階と二階の、同じ北東の一角に位置し、先生は、山のように書物を抱えては、二重生活者のように、一日中、二つの書齋の間を行き来するのであった。

先生によれば、これにはちゃんと理由がある。

「環境を決定する要因は、覚醒―非覚醒、快―不快、支配―服従の三つの基本的情绪次元の操作なのだ。このことを考えずに、やみくもに絵を飾ったり音楽を流したりしても、それは、情報率のみが高まった高負荷環境でしかない」と先生は言う。

「目的に応じて、この三次元を巧みに調和させ、環境全体を最適の状態に維持するの

だ。仕事場ならば、覚醒―非覚醒の尺度が最も重要な要因になる。じつくりと思案にふけるためには、明るさを抑え、刺激物を極力排除した、覚醒度の低い状況がよい。決定した方針を具現化していく段階では、逆に覚醒度を高めて、良い意味の興奮状況を醸成してやるのが望ましいのだ」

だから書齋は、仕事の各段階に応じて瞬時に切り換えられるよう、二種類の環境を用意しておく必要がある、というのだ。

もつとも、先生が、本当にその言葉どおりに、仕事の進捗状況に応じて部屋を移動していたかという点、甚だ疑問ではある。

先生の信州行きに同行すると、二階の二部屋と一階の和室を提供されるのが常であったが、部屋でくつろぎながら、頻繁に階段を往復する足音に耳を傾けていると、とてもその度に仕事の性質が変わっているとは考えられなかった。正直なところ、一同、顔を見合せて、偉人というものは日常生活においてもどこか変わっているのだなあ、と奇妙な畏敬の念を抱いていたというのが本当である。

さて、随分と前置きが長くなってしまったが、これから私は、きわめて幸運な成り行きから入手することのできた資料によって、信州の別宅における村越教授の奇怪な死について語ろうとするものである。

## 2

その夏、村越先生のお供をした学生は三人であった。

先生のご専門は情緒の生理学的測定であったが、信州行きに同行するのは、必ずしも先生の研究室の学生とは限らない。先生は、医学や社会学などの周辺領域にも明るく、大変に視野の広い方であった。また、心理学の発達史や諸学説の社会的背景についても造詣が深かった。そのためか、先生の研究室は、単位履修とはまた別に、熱心な学生が頻繁に出入りする、心理学学究の徒のサロンのような恰好になっていたのだ。

私は、今日の職についてからも、しばしば先生の研究室にお邪魔することがある。

先生最後の信州行きに同行した三君も多くの時間を先生の研究室で過ごしていたから、彼らと顔を合わす機会も多く、満更知らない人たちというわけでもない。ここで、彼らについて私が抱いていた心象を述べておくのも、決して無意味なことではあるまい。

三人の内でも最も年長だったのは、当時修士課程の二年生であった広瀬孝之君である。

広瀬君はなかなか愉快な人物で、彼の温厚な人柄とユーモア溢れる語り口は、聞く者すべてを心地よくさせずにはおかなかった。ただ、他人と議論を戦わせることは余り好きではないらしい。理論とは、日常の行動、作業の中に自然と反映されるもので

あつて、それ自体を独立して討論することは無意味である、というのが口癖であつた。要するに、理論の是非を論ずる前に、まずは、その理論に基づく行為の成果を問題にしてほしいということらしい。

こう書いてくると、広瀬君とは、多少の機知はあつても、綿密な論理を組み立てる頭脳には恵まれない人物であると誤解されはしないかと不安である。しかしながら、彼の、ハイダー均衡理論に自己評価の概念を導入した修正学説が、対人認知理論の新思潮として、早くも学会の注目するところとなつていたことは、是非とも断つておかなければなるまい。

もつとも、広瀬君自身は、學術論文に心血を注いで学会の演壇に立つよりは、フィールドに出て被験者を相手にする時間をこよなく愛しているらしく、その意味においては、頭脳の優秀さは別として、やはり論理の苦手な人と言えるのかもしれない。

この、どちらかといえばおっとりとした広瀬君と正反対とも言えるのが河島栄一君で、こちらは典型的な学者肌で、理論家でもある。小柄で、いくぶん猫背の河島君は、いつも神経質そうなしかめっ面をしていて、破顔一笑するということが殆どなかった。人間嫌いというわけではないのだが、覚めているというのか、時折フツとイロニツシユな微笑を漏らすばかりなのである。河島君は事件当時、学部の四年生だったわけで、

普通は四年生ともなると、夏休み頃にはそろそろ就職の心配など始めるものだが、彼はすでに進学を決意していたこともあって、周囲の学生たちの中にあつて、また一段と超然とした感じを与えたものである。

この河島君は、根っからの議論好きなので、相手構わずに他人を議論に引きずり込むことを無上の喜びとしていて、先輩の広瀬君などからは大いに恐れられていたわけであるが、その一方で、探偵小説の収集という一風変わった趣味の持ち主でもあった。

なんでも、その方面の蔵書は古今東西に渡って三千冊を下らぬらしく、私も何度か、得意顔の河島君から、薄気味悪い人殺しの方法を伝授してもらった記憶がある。休みの日などは、珍本奇本の類を求めて、神保町をはじめ、下井草や江古田、阿佐ヶ谷などの古書店に出没していたそうで、愛書家という共通点のせいであろうか、村越先生とは、妙に意気投合するところがあつたようである。

最後の一人は女子学生で、名前を山浦美香君という。彼女はまだ三年生であつたけれども、なかなかの勉強家であり、描画表現による子供の人格診断という、一風変わった分野に関心をもち、各地の特殊学級や福祉施設などにも足を運んでいたようである。

まずは熱心な学生のだが、初めて会う人には、それが分かりにくい。何事につけ

地味で控えめだからであり、私も、初めて村越先生の研究室で山浦君を見かけたときには、学術的探究心とは無縁の物見高い女子学生が好奇心から研究室の様子を見に来たものと早合点し、冷やかな視線を送った覚えがある。

後になって、山浦君の人となりを知るに及んで、「学問に志す者としては君の地味な性格は損です。他人に業績を横取りされてしまいますよ」などと、冗談まじりに忠告したものであるが、考えようによっては、そんな彼女のキャラクターが、まだまだ男性優位のこの社会において、女流学者として地歩を固めていくための有力な武器になるのかも知れない。

ともあれ村越先生は、こんな三人の学生と共に、最後の信州旅行に出発したわけである。一昨年の夏のことであった。

### 3

記録によると、二日目の昼過ぎに、当惑顔の村越先生が、広瀬君に割り当てられた二階の洋間に顔を見せたのが、事件の発端ということになる。

洋間といっても、たいした調度があるわけではない。緑灰色のカーペットを敷いた六畳間ほどの大きさの部屋に藤椅子と小さなテーブルがあり、右手の奥に昔ながらの



黒いダイヤル式電話が設置されている。反対の隅では、古びた扇風機がぎこちなく首を振っているが、その他には小さな戸棚ひとつなく、広瀬君の持ち込んだ巨大なボストンバックが目立ちすぎるくらいだった。

もともとが一年を通して生活することを目的とした家ではなかったから、先生の書齋を別にすれば、他の部屋も似たりよつたりで、いずれも、部屋の大きさの割には広い空間が確保されていた。

そんなわけで、三人の学生はそれぞれ専用の部屋を与えられてはいたが、誰かの部屋と一緒に時を過ごすことも多く、このときも全員が広瀬君の部屋に集まっていたのである。

「君たち、エックベルトを持っていかなかったかい？」というのが先生の用向きだった。

藤椅子のすぐ脇に寝ころんで文庫本を開いていた河島君が、殆ど無関心といった風情で、ちらりと流し目をくれた。藤椅子からは、たったひとつの椅子を占有していることに居心地の悪さを感じていたのか、遠慮勝ちに体を休めていた山浦君が身を起こした。

「エックベルトって、あのエックベルトですか？」

「ああ、一九一九年に刊行された『心の診断学』の五巻本だよ。エックベルトという男は、精神分析において遺伝的要因を重視しようとした男でね、両親、祖父母の経歴を分析すれば、本人の精神行動を律する方程式を求められると主張して、一時かなり流行したんだ。もつとも、すべてを遺伝的要因で説明しきろうとする理論には無理があつて、ダンラップあたりから相当に批判され、今日では、殆ど顧みられなくなってゐる。ただ、歴史的には、フロイトからアドラーやユングが離れていった時代の研究者で、精神分析の脱フロイト化運動のひとつとして興味深いね」

先生は、饒舌にはしりすぎたと思つたのか、そこでちよつと言葉を切つたが、最後に「フランクフルトの古書店で見つけた高価な本なんだ」と付け加えた。

「で、その本がどうかしたんですか？」

開け放った窓からぼんやりと外を見ていた広瀬君が尋ねた。

「消えちゃつたんだよ」

「はあ？」

「下の書齋に置いてあつたんだが、気がついたら、無いんだ」

「昨日はあつたんですか？」

「それが思い出せない……とにかく見あたらないんだよ」

「五冊全部ですか？」

「いや、それが妙なんだ」村越先生は、当惑したように首を傾げた。

「最初の巻だけは残っているんでね。全巻ないのだったら、東京に持って帰ったまま、忘れていくということも考えられるのだが」

「僕は知りませんよ」

河島君が素っ気なく答えると、広瀬君と山浦君も、同調して頷いた。

「泥棒でも入ったんでしょかね」

「まさかね」村越先生は苦笑された。「エックベルトだけに目をつけるなんて、途方もない大博士だよ。もつとも、それほどに目の利く泥棒ならば、第一巻を残していきはすまいね。全巻揃っていないければ価値も半減してしまう」

「でも先生、犯人は最初の巻だけは、自分で持っていたのかもしれないよ」

「おお、これは河島君らしくもない。いまだき、エックベルトの著作がばらで売りに出されているものかね。よしんば君の言うとおりだとしても、僕のエックベルトは特別でね、第一巻の表紙扉に、フロイトへの献辞が入っているのだ。……まあいい、どこかに置き忘れたのかもしれないし」

「先生ほど、あちこちに本を運ぶ人っていませんものね」と山浦君は大袈裟に目を見

張ってみせると、絵はがきを買ってきますと言い残して出ていった。

河島君は、それでもまだ泥棒説を捨てきれぬ様子であった。

「ねえ先生、第二巻から第五巻までの四冊には、秘密の書き込みかなにかあったのかもしれないよ」

「ハハ、それじゃ探偵小説だよ、君。ところで、今は何を読んでいるのかね」

「これです。新作じゃないんですが、マーガレット・ミラーの『鉄の門』」

「ああ、それなら僕も、友だちに勧められて昔読んだ。僕らにとっては興味深い小説だと思ったね。日本では、林檎先生の作品なんかも読んだよ。『就眠儀式』だとか、なんていったかな、『臨月』とかいう奴が面白かったのを覚えている——さてと、そろそろ失敬することにしようか。エックベルトに気づいたら、よろしく頼むよ」

「山浦君、今夜はロシア料理を作るって張り切ってますよ。楽しみでしよう？」

部屋から出ていこうとする村越先生の背に、広瀬君がからかうように声をかけると、先生はすこしの間、何と答えたものかと躊躇している様子だったが、短く「いいね」とだけ答えて、エックベルト、エックベルトと呟きながら階段を下りていった。

「彼女は料理番じゃない」と、最後に河島君がそっぽを向いた。

その晩の彼らは、山浦君の素敵な手料理に大いに舌鼓を打ったわけであるが、そのあとで広瀬君と河島君は、昼間とは反対に、今度は河島君の部屋に籠もって、何やら議論に熱を上げはじめた。

階段を上りきったところが村越先生の二階の書齋だが、そこから右手に廊下がのびていて、書齋のすぐ隣が河島君の部屋であり、廊下を挟んで河島君の部屋と向かい合っているのが広瀬君の部屋だった。

山浦君は、河島君が是非一緒に誘うのをやんわりと断って、昼間買ってきた絵はがきを持って、一階の和室に引き籠もってしまった。

村越先生は、もうエックベルトの著書のことに関しては何も言わなかったものの、その紛失によって書棚に空いた十八センチの隙間がどうにも気に入らないらしく、あちらこちらと蔵書を移動させては、また何か本をなくすのではないかと、学生たちを心配させたのであった。

午後十時頃のことである。

「———それでですね、広瀬さん、僕は統計を取ってみたのですが、その結果は驚く

べきものとなりましたよ。先生が一階の書齋と二階の書齋を往き来するのは、一見、単なる気まぐれのようなのですがね、実は立派に規則性があるのです」と河島君が熱弁を振るっていた。

「先生は、三食のあとで、最初は必ず一階の書齋に籠もられる。一時間半後に二階の書齋に移動して、一時間後に再び一階の書齋に戻る。そしてまた一時間半たつと二階に移って、そこで一時間を過ごされる。一階の書齋では一時間半、二階の書齋では一時間というのがみそなんです。抱えている本の数は平均十六冊で、誤差はプラスマイナス二冊以内といったところです。先生は今二階の書齋にいらっしゃる。賭けてもいいですが、十五分以内に一階に下りていきますよ」

河島君の熱気にたじたと感じていた広瀬君は、嘆かわしそうに頭を振った。

「君の統計処理が精密であろうことは信じるよ。しかし、だから一体どうしたというのさ。たしかに奇行には違いないよ。けれども、それで精神分裂症と判定することは到底できんぜ」

「なにも、そんなことは言っていませんよ。ただね、先生の書齋間移動は、仕事の都合といった必然的な理由によるのではなく、儀式化したものであると判断することはできません。つまり、先生の放浪的性格を表す因子の一つとしてですね——」

「勘弁してくれエ」と広瀬君は立ち上がった。

「ちよつと友達に電話しなけりやいけないな。またいつかな」

広瀬君に逃げられてしまうと、河島君はごろりと横になって、読みかけの探偵小説を手に取ったのであるが、まもなく思い直したように起き上がると、レポート用紙三枚に渡ってびつしりと書き込んだ数値を検討しはじめた。

「あと十五分以内だな」

そして再び探偵小説を取り上げた。

ちようど、女主人公がついに精神の均衡を破られて、凄惨な投身自殺を敢行する場面であり、たちまちのうちに河島君は、妖しげな小説の世界に引き込まれていったのだった。部屋の外で「あれ、電気が点かないぞ」とぼやいている広瀬君の声も、全く耳に入らなかつた。

自分の部屋に戻った広瀬君は、窓際の丸椅子に腰かけて、受話器に向かって声をひそめていた。

「……そう、もちろん河島の奴さ。村越先生の癖は知ってるかい？ 知らない？ 河島によるとだ、先生は一階の書斎で一時間半、二階の書斎で一時間を過ごすごとに、十六冊の本を抱えて、一階と二階の間を往復するのだそうだ……そうじゃないよ。問

題は時間と本の数さ。うん、大体当たっているようだがね。しかし河島ときたら、それが先生の放浪的性格を決定づけているとか言つてな……山浦さん？ まあまあじゃないか。河島の奴も、もう少し今度のチャンスを活用してくれると、俺としても張り合いがあるんだがね……おせっかいだつて？ ま、そうかもしれんが……ええ？ 先生がかい？ ハハ、まさか。先生の浮気話なんて聞いたこともないよ……へえ、そうかい。でも、先生、それどころじゃないぜ。なんてつたつて、一番の恋人に逃げられちまつてさ……エックベルトだよ……そう、『心の診断学』さ。書齋から消えちまつたんだそうだ……まさか、大方どこかの本の山に埋もれているんだろうさ……いや、だつてね——あ、失礼。え、今の音は何かつて？ さあ、それが俺にも……ちよつと待つてくれるか」

広瀬君は、何か階段を激しく転げ落ちるような物音を耳にして、何事かと、廊下に出て電灯のスイッチをひねったのであるが、先刻と同じように明かりは点かず、階段の電灯も同様であった。階下から階段にかけては全くの暗闇で、下のほうに目を向けても、何も見えはしなかった。そして、先程の物音の余韻のように、再び何かパタンと階段で音を立てたのを最後に、家の中はしんと静まり返った。まもなく、「今の凄まじい音はなんですか」という河島君の声と共に、彼の部屋の



扉が開いて明かりが洩れてきたのであるが、それでも階段の下を見通すには、殆ど助けとはならなかった。

「なんだって、下の廊下まで真っ暗なんだ？」

「誰もいないからでしょう——お待ちなさい、広瀬さん。慌てて足でも踏み外したら大変だ。すぐに山浦さんが部屋から出てきますよ……それよりも、先生は？」

「それを心配しているんじゃないか……おおい、山浦さん、下の電気を点けてくれな  
いか？」

やがて、河島君の予言どおりに、階下でガラリと引き戸の開く音がしたが、一向に明かりが点く様子はない。代わりに、不安気に震える懐中電灯の光が現れた。

「どうしたんですか？」

「なんだ、下は停電かい？」

「いいえ、でもスイッチがどこだか分からなくって……今、そっちに行きますから」

「いや、それよりも階段を照らしてくれたまえ。僕らが下りていこう」

広瀬君の提案を受けて懐中電灯がゆらりと揺れた途端、三人は、示し合わせたように揃って息を呑んだのである。

両肩が壁に触れんばかりに狭い、急勾配の階段の下には、村越先生がうつ伏せになって倒れていた。

## 5

こんなとき、通常ならば、人々は素早く村越先生のもとに駆け寄るのであるが、この場合には、とてもそんなわけにはいかなかった。ただでさえ狭い階段は、中ほどから下にかけて、おびただしい数の書物が散乱していて、足の踏み場さえ容易には見つかからない有様だったのである。一階にいた山浦君はともかく、広瀬君と河島君は、到底階段を駆け下りるどころではなく、足下の本を一冊ずつ拾い上げながら、一段また一段と、細心の注意を払いながら、ゆっくりと十四段の階段を下りるほかなかった。

河島君は、何冊めかに拾い上げた書物の表題をみて、アッと叫び声をあげた。

「無くなっていたエックベルトですよ！　これは第三巻だ。先生、どこで見つけたんだらう……」

さらに二段下——下から五段目には第五巻が、落下の衝撃のためか表紙の角をつぶされて落ちていた。その三段下には、比較的傷みの少ない第二巻が落ちていた。さらに第四巻が、ただ一冊だけ、死体に被せるシーツのような感じで、開いたまま伏せ

た恰好で、村越先生の背中に乗っていた。

「待って、手を触れないほうがいいかもしれない」

広瀬君がその本に手を伸ばしたときに、河島君がそう言って、本を拾うのはそこま  
でとなった。結局、階段の下や廊下にまで飛んでいたものを合わせると、全部で十九  
冊の書物が散らばっていた。

因みに、エックベルトの『心の診断学』は、紛失していた第二巻から第五巻までの  
四冊が階段で発見されたが、紛失を免れていた第一巻だけはそこに見あたりず、あと  
になって、書棚に収まったままになっているのが確認されたのだった。

肝心の村越先生はといえば、うつ伏せの姿勢であることから、階段の頂上近くから、  
前のめりになって転がり落ちたものと推察された。十四段の急な階段を真っ逆さまに  
転落したのだとすれば、これはもう助かるわけもない。首の骨が折れて、すでにこと  
切れていることは明らかであった。

先生愛用の金縁の老眼鏡は見事なまでに砕け散っていた。舶来の腕時計のカバーガ  
ラスにもひびが入っていたが、こちらは勤勉にも、まだ時を刻み続けていた。先生は、  
浴衣姿でスリッパを履いておられたが、左のものは足から脱げて、階段の中途に残さ  
れていた。

「こんなに本を抱えて、真っ暗な階段を下りようなんて、無茶なんだ」と、河島君がしばらく続いていた静寂を破った。

「でも、普段だって電気なんか点けないで、すたすたと昇り降りしていらしたわ。目をつぶっていたって、とても足なんか踏み外しそうになかったのに」

「そりゃあね」と河島君は皮肉っぽく笑った。

「あれだけ本を抱えていたら、点けたくったって、とても電灯のスイッチなんかには伸ばせまいさ。たいそう立派な修練の賜物には違いないが……馬鹿だよ。ああ……こんなにガタガタになっちゃって、先生御自慢の蔵書が台無しだな」

「それにしても、ついてなかったな。二階の廊下と階段は電灯が点かず、一階の廊下の電灯も消えていて、文字通り真っ暗闇だったとはね」

「あたしが廊下の電灯を点けたままにしておけば……」と山浦君が顔を伏せると、河島君はムツとしたように眉を上げた。

「なにを馬鹿な。昨日だって、そうだったでしょう？ 下の廊下は消してあった。それが先生の習慣だったんだよ。山浦さんが、あれこれと気に病む問題じゃない。二階の廊下にしたって、まあ、たしかに今は電球が切れているみたいだが……どうせ、先生は点けやしなかったさ」

「それにもかかわらず、先生は足を踏み外した。不幸というほかはないな」と広瀬君は溜め息をついた。「山浦さん、別にそんなつもりで言ったんじゃないんだ。それに、たしかに河島の言うように、どちらでも関係のないことだったよ——何をみてるんだ、河島」

河島君は、怪訝な風を見せて、村越先生の傍らにしゃがみ込んでいた。

「腕時計が……シャフハウゼンのIWCなんですが、まだ動いているんですよ。えらく頑丈だと思いませんか？ 一体、どのくらいの高さから落ちたんだろう」

「どのくらいって……」広瀬君は、目測するかののように二階を見上げた。

「てっぺんからの高さは簡単に求められますよ。すごく簡単なんですがね」

河島君は、そこでちよつと言葉を切ると、挑むように広瀬君の顔を見た。広瀬君は、返事をする代わりに、僅かにかぶりを振っただけだった。答が分からなかったのか、あるいは河島君の挑発的な口振りが癪にさわったのか、それははつきりしなかった。

「なにね、階段一段の高さに、段数を掛ければいいんです」

河島君はそう言って、どこからともなく小さな巻尺を取り出した。

「十八センチが十四段で、二メートル五十二センチが正解です」

「で、それがどういう結論になるのかね。腕時計が壊れていないのが不自然だという

のかい？ 高いところから落ちたら止まるはずだと言うのは、ちよつと短絡的じゃないかな。実際にどれだけの衝撃が加わったかについては、村越先生の落ち方次第で、いろいろな場合が考えられる。それに、まだ動いているといつても、機械に全く異常がないとは限らない——」

「二人ともやめて！ そんなことを言い争っているよりも、早く病院に知らせなきゃ！」

たまりかねた山浦君の叫び声に、いち早く冷静さを取り戻したのは広瀬君だった。彼は、落ち着いた足取りで玄関まで行くと、玄関脇の小さな木製スタンドに置かれた電話機の受話器を取り上げた。この電話機は、二階の広瀬君の部屋の電話と親子電話になっていたから、まだ回線がつながったままになっていた先刻の通話の相手に手短かに事情を説明し、軽くフツキングしたあとで、一一〇番をダイヤルしたのだった。その場の状況を素早く把握し、山浦君が口にした病院ではなく、警察を第一の通報先としたところは流石であった。

その晩、所轄警察署からやって来た警察官は、現場の様子をひと通り見て、三人から簡単な事情聴取を行っただけで引き上げている。

警察官が唯一不審を抱いたのが、一階と二階の廊下、そして階段の電灯までも消えていて、階段一带が真っ暗だったという点であった。暗いから転落したのだと考えればそれまでだが、そのような危険な状態で階段を下りようとしたのは不自然ではないかという疑問である。

二階の廊下の電灯は、前の晩までは正常だったことが三人によって確認されたが、調べてみるとやはり電球が切れていた。その日は、河島君の部屋を出た広瀬君が試みる以前に電灯を点けようとした者がなく、いつ切れたのかははっきりしなかったが、埃まみれの電球は相当に古そうな代物であり、いつ切れても不思議はなかった。

また、階段の照明は傘を被った裸電球だったが、電球が微かに緩んでいることが分かり、しっかりとねじ込んでやると、正常に点灯した。山浦君が、夕方に掃除機を二階に持って上がるうとして柄をぶつけたと話したことから、そのときに緩んだものと考えられた。

一階の廊下の電灯には異常はなかった。しかし、前の晩も点けていなかったということであれば、それ以上問題にする理由もない。スイッチの場所が分からなかったと

いう山浦君の話ももつともで、壁に掛かったカレンダーに半分隠れたスイッチは、予め知らなければ、手さぐりで探り当てるのは至難の技と思われた。

山浦君といえ、七時すぎに夕食の後片付けを終えてからは、自分の部屋で、東京の両親や同級生に宛てて、絵はがきを何枚か書いていたのだという。

「十時すぎまでずっとですか？」という問いに、山浦君は一瞬躊躇の色を見せたが、八時四十分頃、先生の一階の書斎に行ったと語った。

「描画法とT A Tとの相関性について、教えていただきたいことがあったんです」

「僕らが書斎に押しかけると、先生ご機嫌斜めなのになあ」と河島君が不審そうな目を向けると、山村君は不機嫌そうな顔で、「夕食の後片付けをしているときに、教授が飲みものを取りにいらして、あとで書斎においでということになりました」と付け足した。

書斎には二十分ほどいたという。九時を回った頃、先生が手近な本を何冊か積み重ねて、落ち着かぬ素振りを見せはじめた。そこで山浦君は、これは二階の書斎に行くこととしていたのだと察して、自分の部屋に引き上げたのだという。

「エックベルトは？ 書斎にあった？」と河島君。

山浦君は、ちよつと考えてから「分からない」とかぶりを振った。村越先生は特に



話題にしなかったという。

他の二人は、夕食後、まだ水仕事をしている山浦君を残して、早々に河島君の部屋に上がってしまったため、山浦君と村越先生とのやりとりについては、何ら補足的な話をするにはできなかつた。

結局、村越先生が生きている姿を最後に見たのは、山浦君ということになる。

しかし、山浦君が村越先生に教えを受けていたという事実は、それ以上の意味を持たなかつた。不運にも電灯が全て消えていたことにひと通り説明がついてみると、他には、これといって不審な点も見当たらなかつた。警察官も、村越先生の死を事故死と判断したのであろう。

## 7

この夜、広瀬君が二階で話していた相手が、のちになって、私に事件の顛末を聞かせてくれたH君である。村越先生が亡くなった翌日、H君は、噂にのみ聞いていた村越先生の蔵書に対する興味関心も手伝って、一人別宅を訪れたのだが、事の次第を聞き、現場をひと目見るなり、即座に、村越先生の死が単なる事故でないことを見抜いたという。

最近あまり流行らないようだが、ひところの探偵小説においては、すべての手掛かりを提示した段階で、しばしば読者に挑戦状を突きつけたという。私も、H君の炯眼に敬意を表しつつ、ここで『読者への挑戦状』を挿入してみようではないか。

——さて読者よ、今やすべての手掛かりは示された。村越教授変死の真相如何。

## 8

「馬鹿な！ 君は、本気でそんなことを言ってるのか」と、私は、思わず語気を荒くしたものである。

ひよっこりと、H君が私の研究室に顔を出して、信州の別宅で検分してきた事柄について、報告と併せて所見を述べた時のことである。

「殺人事件ですね」と彼はこともなげに言ったのだった。「エックベルトの行方が決め手です」

「本が消えたから殺人事件だっていうのかい。そんな無茶苦茶な説明があるかね。そもそも、エックベルトの本は、すぐに見つかったんだし——」

「ああ、本が消えたことは、どうでもいいのです。そうではなくて、再び見つかったことが問題なんですよ。先生、一体、どうしてエックベルトがあんな場所に出てきた

「んだと思いますか」

「あんな場所って——階段のことかい。そんなことは分かりきっているじゃないか。村越先生は、どこかに置き忘れていたエックベルトの本を見つけて、他の本と一緒に下の書齋へ持って行こうとしていたのだ。ところが、階段が真っ暗だったので、うっかりと足を踏み外して——」

「それが間違っているんです。たしかに、四冊のうち三冊までは、それで説明がつきます。しかし、最後の一冊——村越先生の背中にかぶさっていた第四巻だけは、ちよつとまずいですね」

「どういうことだい」

「教授は、山のように本を抱えて、階段を下りようとしていたところ、何らかの理由により、前のめりになって頭から転げ落ちた——そうですね？」

「ああ。足を滑らせて尻餅をついたただけだったら、首の骨は折らないよ」

「私もそう思います。すると、妙なことになる。前のめりになって転落したのならば、抱えていた本は、当然、前方に投げ出されたと思いませんか。どう考えてみても、教授と運命を共にした本が、教授の背中に乗っかる筈はないのです」

「しかし——」

「まあ、待ってください。本というものは、そんなに転がりやすい品物ではありませんから、階段の途中で止まってしまつて、教授と一緒に下まで転がつていかなかったとしても、それは何の不思議もありません。しかし、それが死体の上に乗っていると、この場合は、落下する途中で、教授が本を追い越さないといけないことになります。物理法則に反すること、ちよつと想像できませんね。唯一考えられるのは、教授が本を高々と放り上げておいて、本が落ちてくるまでの間に、素早く階段を転がり落ちて死体になつたという場合ですが、こんなことは、故意にでもやらない限りはあり得ません。つまり、どう考えてみても変なんです」

「では、どうということになるんだ」

「私には明白に思えます。本は——少なくともエックベルトの第四巻だけは、あとから別に飛んできたのですよ」

「なぜ？」

「教授以外の誰かの仕業でしょうね」

「そりゃあそうだろうが、なんのためだい」

「さあ、そこです。まず考えられるのは、その人物にとって、エックベルトの本が死体の周辺に置かれている必要があつたという考え方です。その人物が、意図的に死体

の周辺に本を置いたことが考えられます」

「全然意味をなさんと思うね」

「すると、おそらく逆の考え方が正しいのです。つまり、本は、死体の周辺に置かれる必要があったのではなく、当初存在していた場所で発見されないことが重要だったのです。言い換えれば、その人物が当初存在していた場所から排除した結果として、死体の周辺で発見されたに過ぎなかったのですよ」

「しかし、先生が転落したあとで本を置く——君の説によれば、排除するという言い方が正しいのかもしれないが——といっても、殆ど時間的な余裕がなかったはずだよ。すぐに広瀬君たちが部屋から出てきて、死体を発見しているのだからね。わずかな時間に大層な危険を冒したものだ。なぜ、そんなに慌てて、本を移動させる必要があったのだろうか」

「それが答になっっているではありませんか。単に、本を発見されて困るだけならば、始めから、見つけたりそうにない場所に隠しておけばいいのです。しかし、その人物はそうしなかった。教授が転落したあとで、大慌てで本を移動させなければならぬような場所に、本を置いておく必要があったのですよ。」

それでは、大慌てで本を移動させなければならなかった場所とは、一体どこでしよ

うか。考えられる答は、ただ一つです。つまり、教授の転落する音を聞いたみんなが集まってきたが最後、間違いなく見つかってしまうような場所だったのですよ。――さて、どこでしょうね。真っ暗闇の中です。廊下の片隅などならば、電灯が点かない状態になっていましたから、殆ど見つかる心配はなかったでしょう。学生たちの通り道であって、彼らが九割方気がつきそうな場所……残された場所は、やはり階段だけのように思われます」

「しかし、本は、現に階段で発見されたじゃないか」

「そう、一見矛盾した結論です。だから、同じ階段ではあっても、実際に発見されたような状態ではなく、きわめて不自然な場所に、きわめて不自然な形で置かれてあったのだと推測されます」

「焦らすなよ。それに、どうして、その場所で発見されてはまずかったんだ」

「犯行計画のすべてが露顕してしまうからです。場所は……そう、おそらくは、二階の廊下から一段下りた所です。そうでないと成功しないと思うんです。――分かりますか？ エックベルトの本こそが、村越教授殺害の凶器だったのですよ」

「本が凶器だって？」

「盗まれた本四冊の厚さの総計と、階段一段の高さとが、共に十八センチで完全に等

しいことに気がつけば、すぐに分かるはずですよ。犯人は、四冊の本を積み重ねて、階段の最初の段に置いておいたのです。暗闇の中をやって来た教授は、階段に置かれた本だとは気づかずに、廊下の続きのつもりで、その上に乗ってしまいます。狭い階段ですからね、まず確実に本の上に足が乗ります。弾力や感触などは微妙に違うはずですが、教授はスリッパを履いていましたから、気がつかなかったでしょうね。――そしてどうなるか。教授は最初の一段のつもりで足を下ろしますが、積み重ねた本のために、段の高さは倍になっているのだからたまりません。たちまち、もんどりうって転落してしまふ。そのあとで、役目を終えた本を段から取り除いてしまえば、殺人装置は跡形もなくなってしまう。以上、立派な殺人事件です」

「しかし、まどろっこしいね。なぜ、そんなトリックを使わなければならぬんだ。暗闇に紛れて、両手で突き落とせばいいじゃないか。真っ暗だったんだ、他の人間が出てきたって分かりはしない。頃合を見計らって、『やあ、君も今の音を聞いたかい』とか言って、部屋から出てきたばかりのふりをして誤魔化せば済みそうなものだ」

「いやいや、これは立派な時限装置になるわけですよ。教授が転落する瞬間にアリバイがあれば、犯人にとっては、心強い限りではないですか。犯人は、事故死に見せかけたかったのでしょうが、万一、見破られても、自分だけは容疑を免れることができ

る——そんなふう考えたのだと思います。もったも、そんな小細工のせいで、却って自らの正体を暴露してしまったわけですがね」

「そうかね」

「ひとりずつ検討してみましたよ。まずは山浦さんですが、彼女は、確かに立派なアリバイを持っていました。一階にいる人間が、階段から人を突き落とすことはできませんからね。つまり、彼女には偽階段のトリックを使う動機はあるのです。しかし、問題点もありますね。彼女には、教授が転落したあとで本を始末する機会がない。二階にいる学生たちが出てくる前に、素早く階段を往復して本を始末したということも、あり得なくはないのですが、自分が二階に行ってしまったら、一階にいたから殺せなかったという折角のアリバイまで怪しくなってしまうって、意味がありません。それに、沢山の本が散らばった階段が、とても駆け上がれるような状態でなかったことは、直後に広瀬と河島君が思い知らされたとおりで、時間的にみても、不可能だったと断定していいと思います」

「そうだろうね。彼女はシロだ」

「すると、二階にいた二人のうちのどちらかです。河島君はどうでしょうか」

「彼は、自分の部屋で本を読んでいた」



「ええ、本を読んでいたか音楽を聞いていたか、彼の言葉の真偽は確かめようがありませんが、要するに、一人で部屋にいたというだけのことです。これはアリバイになりませんね。まさに、両手で突き落としておいてから暗闇に潜んでいるのと、何ら変わりがないのです。物音を立てないように気をつければ、自分の部屋に戻ってしまうことだってできたでしょう。いずれにしても、河島君には偽階段のトリックを使う必然性が全くないわけです。何の効果も期待できません」

「それも分かる。同感だね」

「さて、残ったのは広瀬です。彼も一人で部屋にいたのですから、河島君と同じ条件のように思えますが、実は根本的に事情が違うのです。それは、私と電話で話していたということ。おまけに彼は、御丁寧にも、村越教授が転落する音を聞かせてくれているのです。これは、なにげないようできて鉄壁のアリバイですよ。自分の部屋で電話をしながら、階段にいる教授を突き落とすなんて芸当はできやしませんからね。電話機が部屋の入口近くにあればまだしも、あの部屋のように、奥にあつたら絶対に無理です」

「それはそうだな」

「かくして、広瀬だけが犯人の資格を有することが判明したわけです。彼は、予めエ

ックベルトの本を盗み出し、二階の廊下と階段の電灯を点かなくしておきました。本は、もちろんエックベルトでなくてもよかったです。階段の段の高さと同じだけの厚さになれば、何でもよかったです。ただ、教授が『エックベルト、エックベルト』と騒ぎ立てて、みんなの注目を集めてしまったのは誤算だったかもしれませんね。決行までの間は、多分あの大きなポストンバックに隠していたのだと思います。電灯については、河島君の話では、教授は階段の上り下りに際してわざわざ点けようとしなかったようですが、念のために細工したのでしよう。あるいは、本を始末する時間を少しでも稼ごうという意図もあったかもしれない。廊下の電球は、何かで衝撃を与えて切ったか、または、事前に切れた電球を用意して取り替えたのでしようね。

さて、彼は、河島君との議論を切り上げて自分の部屋に戻ると、ポストンバックに隠してあったエックベルトの本を階段に仕掛けます。それから私に電話を掛けて、じつとその時が来るのを待ったのです。とにかく、教授が書斎から出てきて毘にかかるまでは話しつづけなければなりません。そして、教授が転落する音が私に聞こえたことを確認した上で、部屋を出て、仕掛けておいた本を下に蹴落としてしまったわけです。四冊の本が落下する物音は隠しようがないですが、何十キロもの肉体と書籍が雷のような音を立てたあとのことですから。そんな付録のような物音のことは誰も気にとめ

やしないし、十分もたてば、最初の音とごっちゃになって忘れてしまえますよ。正直なところ、私自身も、四冊の本が落ちる音を聞いたのかどうか、記憶が定かじゃないんですよ」

「しかし信じられないな——広瀬君が殺人犯人だなんて」

「論理的な結論です。それとも、なにか腑に落ちないことでもありますか」

「たしかに筋は通っているが、随分とあぶなっかしい計画じゃないかな。誰もが使う階段にそんな仕掛けをしておいたら、誰が落ちこちるか分からないじゃないか」

「それでもないと思いますよ。河島君が、村越教授が二つの書齋を往復する時間には規則性があると言っていたそうですが、電話の様子では、広瀬も、その程度のことにはとつくに気がついていようでした。決して何時間もの間罠が仕掛けてあったわけではないと思います。おそらくは、ほんの数分間のことでしょう。それでも、河島君がとんでもない時に部屋から出てきてしまう危険性はありますが、そのときには多分、河島君を自分の部屋に引っ張り込んでしまうつもりだったのではないのでしょうか。電話で河島君のことを話題にしていたのも、そのための布石だったと思うのです。私だって満更知らない人間ではないし、『君と話したがっているからちよっと出てくれ』とか言われれば、なかなか断れないものですよ」

「動機は何だろうか？」

「それは分かりません。私は、広瀬や河島君のことなら多少は知ってますが、村越教授の人となりについては殆ど知識がないのです。なぜ殺されたのかわんて、知るよしもありませんよ……ただ、村越教授、人気はあるけれども、必ずしも評判がいいわけではないですね。特に優秀な学生からは、あまりよく言われていない。学生をおだてて自由奔放に話させて、その中から研究のアイデアを見つけているというのですよ。業績の横取りというわけではないのですが、インスピレーションを盗まれたと感じる者もいるようです。広瀬の肩を持つわけじゃないですが、案外そんなところかもしれないですね」

## 9

警察内部でどのような動きがあったのかは承知していないが、数日後、広瀬君が逮捕されて、H君の語ったとおりの犯行方法であったことが明らかになった。

動機は、やはり学問上の確執とでもいうべき性質のものだったようであるが、これについては、広瀬君は余り多くを語ろうとしていない。広瀬君の自白の断片を色々と漏れ聞いてはいるが、それをここに書けば、いろいろと尾緒がついてマスコミ賑わす

だけであろう。被害者と加害者の双方を知る者として、それだけは到底忍びがたい。不満に思われる読者も多いことと思うが、どうか私がこのまま筆を置くことをお許し  
いただきたい。

(了)